



附属図書館蔵書1000万冊記念事業特別展示 1000万冊のストーリー ～駒場図書館篇～

東京大学附属図書館の蔵書*は、2023（令和5）年度に1000万冊に達しました。

1000万冊の蔵書を持つ大学図書館は、国内初となります。

これを記念して附属図書館は特設サイトを開設しました。

東京大学附属図書館 蔵書1000万冊記念1000万冊のストーリー



この中から「駒場図書館篇」として駒場図書館に関連する部分を展示します。

*図書と製本雑誌の冊数の合計。

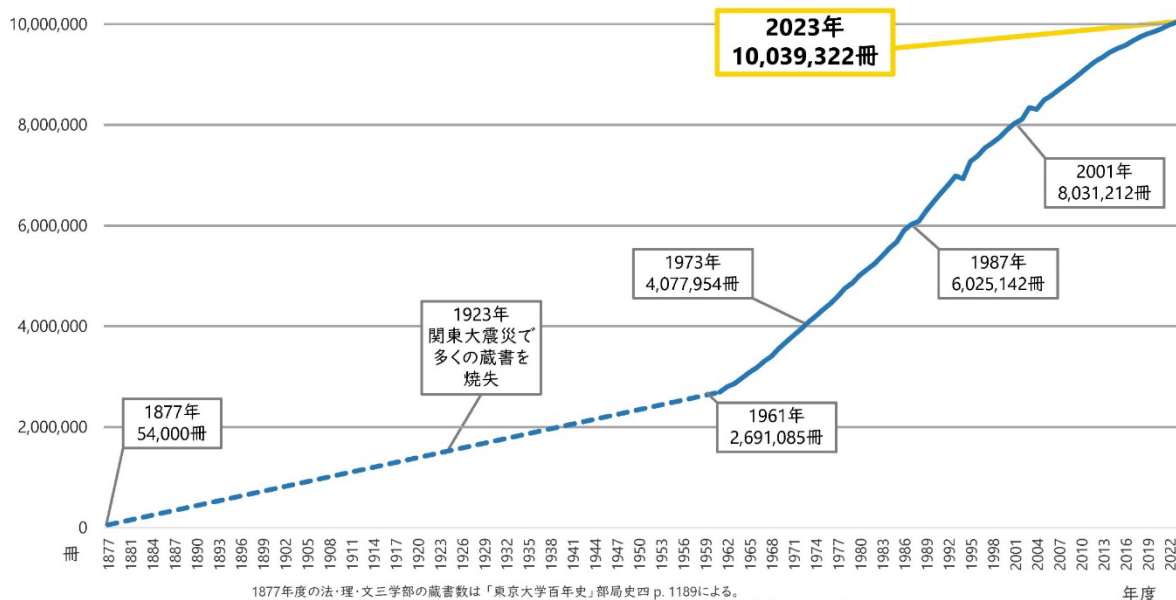
未製本雑誌や電子リソース（電子ジャーナル、電子ブック、データベースなど）は含みません。



附属図書館蔵書数の推移

東京大学附属図書館蔵書1000万冊記念
1000万冊のストーリー
UTokyo Library Milestone of 10 Million Volumes

東京大学には、総合図書館、駒場図書館、柏図書館という3つの拠点図書館と、学部・研究科や研究所等にそれぞれ設置されている27の部局図書館・室があります。これら30の図書館・室が一体となって「共働する一つのシステム」としてサービスを提供しているのが「東京大学附属図書館」であり、蔵書数1,000万冊は附属図書館30館の蔵書の合計です。



1877年度の法・理・文三学部の蔵書数は「東京大学百年史」部局史四 p. 1189による。

1877～1960年度までの正確な蔵書数は不明。特に1923年の関東大震災で多くの蔵書を焼失しており、単なる右肩上がりではない。

1961～2023年度の蔵書数は各年度の附属図書館統計表による。

年度

私が選ぶ1/1000万冊



〈叡智を求める人〉が〈国語〉を読まなくなる時代の〈国語〉の図書館
—水村美苗『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』（筑摩書房）を読む—

日本の大学は、日本語をそれで学問のできる〈国語〉にした。その〈国語〉で言語化された叡智が、日本語の図書という形で本学の図書館にもあまた集められている。自分が知っている以上のことを知ろうとする〈叡智を求める人〉は、ここに既に収められ、あるいはこれから加えられてゆく膨大な〈国語〉の図書の中に、はたしてこれまでと変わることなく〈読み継がれる〉言葉を見出して行くのだろうか。

『日本語が亡びるとき』の中で水村美苗が言うように、〈叡智を求める人〉が〈普遍語〉たる英語を読むことを優先して〈国語〉を読まなくなれば、〈叡智を求める人〉は、読んでほしい読者に届かない〈国語〉で書く意欲を失う。こうして読む側の期待の低下と、書く側の意欲の低下との間で負のスパイラルが生じ、この悪循環はついには〈読み継がれる言葉〉としての価値を〈国語〉から奪う。

図書館の蔵書が1000万冊に到達したことはご同慶の至りだが、言葉を読み継ぐ文化の行方が気がかりでならない。

石田 淳

駒場図書館館長
大学院総合文化研究科 国際社会科学専攻 教授



全集を読む

1年生で所属していたのは理2のロシア語クラスであったが、この小さい集団は、駒場祭で演劇をやることを決意した。ロシア語クラスなので人数は少なく、演技の経験がある者も、裏方をやったことがある者もほとんどいない。主役をやるという男子学生が、相手役をやってくれるというほかの大学の女子学生を連れて来て、彼女がさらにもう一人同じ大学の女子学生を誘って、最後にはクラスからも端役ならばやってもよいという者が名乗り出たので、登場人物の少ないものならばなんとか成立しそうな状況にはなった。できそうなものを選ばなければならないが、そこでたどり着いたのが、駒場キャンパスにあった図書館の、戯曲の並ぶ一角であった。

戯曲を読むという経験はあり、いくつかの作品から適当に切り出して高校の文化祭で見世物にしたこともあったが、今回はもう少し関わる人間も多いので、責任は大きい。

役者はもちろん、裏方に割ける人数も多くはなく、予算や労力の制約もあるために、大道具小道具や照明にあまり凝るわけにもいかない。手ごろなものはないかと思っていきあたったのが『イヨネスコ戯曲全集』であった。

イヨネスコは名前を知っている程度であったが、たまたま図書館で最初に目についたのが彼の実全集だったので、それを手に取り、しかし結局ほとんどすべてを読んでしまうことになった。



読んで面白いということもあったが、実際に自分たちで制作するとすると、「禿の女歌手」や「二人で狂う」など、ああここでどっと笑いが出るんだなといった想像が勝手に膨らんで来る。長さや登場人物からいって適当だったのは「授業」、何とかできるかもしれないと思ったのは「椅子」であった。最終的に決定するまでに、全集を何度か読み返して、妥当なところは「授業」かなという結論になった。

実際に演ずることになったのは、別役実の「あーぶくたった、にいたった」であって、これは1年生が探せる範囲では大学の図書館にはなく、住んでいた街の公立図書館で見つけた。「授業」に問題があったというわけではなく、たまたま角野卓造が男1を演じた「あーぶくたった、にいたった」をテレビで見たのが印象に残ったのである。重要な役割を果たす電信柱をどうするかが問題だったが、体を使って電信柱を調達してやるのではなく、頭を使ってどうにか解決した。いきあたりばつりでの選択ではあったが、理系の1年生が思いつきで演劇をやろうとするとそういうことになるものなのかもしれない。

クラスで手分けして金屏風を作ったり、八幡山にあった照明専門の会社の人に相談して「昔やった村芝居みたいなものを想像すればいいのかな」などと言われたりしながら、なんとか、2日間であったが3日間であったか、1日1回の公演を行った。



駒場図書館自慢の1冊



第一高等学校旧蔵資料

駒場キャンパスの図書について語る際、外すことのできない資料群がある。それが第一高等学校旧蔵資料、所謂「一高文庫」である。駒場キャンパスの由来についていま一度振り返ると、本郷向ヶ丘弥生町にあった旧制第一高等学校が、駒場にあった東京帝国大学農学部と敷地交換する形で駒場に移ってきたのが昭和10年(1935)。本郷キャンパスで数多くの建築を手がけた内田祥三による本館(現1号館)、講堂(現900番教室)、書庫及閲覧室(現駒場博物館)などが建てられ、今に繋がるキャンパスの輪郭がかたち作られた。その後、昭和25年(1950)、旧制高校の廃止により一高の歴史に終止符が打たれると、同じく改組となった東京高等学校(旧制)とともに東京大学教養学部へと包摂され、同校の旧蔵資料も受け継がれた。

現在、図書以外の資料は駒場博物館に、図書館での保管に適したものは駒場図書館とキャンパス内各研究室にて管理されている。蔵書は和・洋・漢籍と幅広く、ドイツ語による数学や図学の教科書など、洋書による教育実践があったことを感じさせるものが多くあるほか、昭和14年(1939)刊『第一高等学校六十年史』に稀覯書として紹介のある「本朝世紀」(写本)、学生が実習で測量し作成した実測図を含む教育用掛図、日本初のドイツ語雑誌である「Von West nach Ost(『東漸新誌』)」など、教育史的、社会史的にも貴重なコレクションとなっている。



イヨネスコの「授業」は、教授役を仲谷昇や中村伸郎が演じたものが有名で、たまたまそちらを見ていたら「授業」が選ばれていたかもしれない。そのころ出かけた、国立市のどこかでやっていた小さな講演会では、中村伸郎さんは19世紀の演技をするいどなっていた一人の役者さんなので、お元氣なうちに見ておいてくださいと、別役実が語っていた。のちに井の頭線沿線に住むようになると、自転車に乗った別役実もたびたび見かけることになったが、そのころにはもう、駒場祭で演劇をやったことも、ほとんど思い出さなくなっていた。

結局演目には選ばなかったが、それでも、イヨネスコの全集を読んだ経験は、その後の私の人生に大きな影響を及ぼすことになり、図書館での出会いは忘れられないものとなった——とでも書けばよいのだが、イヨネスコどころか、別役実も、あるいは演劇自体も、大学1年生の春から秋にかけて出会ったきりであり、その後進んだ学科も、専門に進んだ研究分野も、こういうことには何のかかわりもない。

それでもこの経験から学んだことはある。まず、書店などにたくさん置いてある小説の類はもちろん、別役実の戯曲のようなものでも、大学図書館は所蔵しておらず、そういうものを読みなければ相変わらず街の図書館に行くほかはないということを知った。しかし、大学の図書館には街の図書館にはない本が揃っていて、困ったときには行ってみれば何か解決策が見つかる、窮したらまずは誰かの全集を読んでみれば手がかりがあるということも体得した。



『東漸新誌』は、森鷗外研究者の間で長らく「幻の雑誌」とされてきたもので、2018年に駒場で発見された合冊資料により、第5号所収の演劇論「Über die Theaterfrage(演劇問題に就いて)」など鷗外のドイツ語論文を全て読むことができるようになった。

一高の歴史を紐解けば、明治7年(1874)の東京英語学校から始まり、明治10年(1877)に東京大学豫備門、明治19年(1886)に第一高等中学校、明治27年(1894)に第一高等学校と幾度となく改称されているが、その足跡は「一高文庫」における蔵書印のバリエーションの豊富さにより垣間見ることできる。また、早世した同級生の写真を貼付し思い出を綴った書き込み本なども散見され、若しい気概と学ぶ喜びに満ちていたであろう一高生の青春に思いを馳せ、その地続きに今の駒場があると改めて感じることもできるだろう。本郷向ヶ丘の地名に因む「向陵」の名に込められた一高の伝統は、確かに駒場の地に引き継がれ、その面影はそこかしこに散らばり、ことあるごとにちらりと姿を覗かせている。



いや、街の図書館であってもイヨネスコの所蔵はあるのだが、運よく目につくところに置いてあるとは限らず、目録で探し当てた末に頼んで書庫から出してもらう場合が多いのではないかと思う。この点では、開架に全集の類が贅沢に並べられている大学の図書館は、漠然たる必要に駆られた人々にとって、貴重な救済の場であると言える。

後になっても、こうした漠然たる必要に迫られる経験はなんどもあったが、そのたびに図書館に救われることになった。これと思った全集を全部読んでみる、読まないまでも目次を追ってみるという作業も、余裕があればいまでも無意識のうちにやっている。もともと、「漠然たる必要」とはいっても、理系の小さなクラスで演劇をやるなどというのは、勝手な思い付きから現れた、付き合わされた人々の迷惑も顧みない「必要」である(資金稼ぎに企画したロシア料理の屋台は無残にも大赤字を出した)。

この種の「漠然たる必要」を、多々勝手に作り出す人間というのはときどき見かけるが、世の中にはそういう人間がいて、彼らがもっている、ややはた迷惑な、先の見えない情熱のようなものに、何であれ形を与えてしまうという不思議な、あるいは厄介な力が、大学図書館には備わっているというのも、今になって思えば、1年生のうちに知った大切なことであつたかもしれない。

岡本 拓司

図書館行商議委員会
大学院総合文化研究科図書館長
大学院総合文化研究科 広域科学専攻 教授





一高創立150年を迎えて ～蔵書から辿る一高の歴史～

2024年は東京大学総合文化研究科・教養学部の元となった

(旧制)第一高等学校(一高)の源流である

東京英語学校開設から数えて150年にあたります。

これを記念して駒場図書館に残る一高の蔵書から

それぞれの年代の蔵書印をパネルで展示します。

一高蔵書の資料から今回は「鹵獲本(ろかくほん)」と、早世した

同級生の写真を貼付して思い出を綴った図書の紹介をします。

一高図書の 蔵書印



開成所	東京開成所印	長崎東衛官許	長崎府洋学局蔵書印
大学南校	南校図書	第一大学区 第一番中学校図書	第一大学区 開成学校図書
外務省洋語学所記	東京外国語学校図書	東京英語学校図書印	東京大学医学部図書

東京大学 法文学部図書	東京大学法文学部 書庫所蔵	東京大学図書之印	東京大学予備門図書
司法省図書印章	東京法学校図書之印	工学寮印	工部省図書印
工部大学図書之印	工部大学校図書	第一高等中学校図書	第一高等中学校 図書閲覧室用
第一高等学校図書印	第一高等学校 図書閲覧室用	東京高等学校 図書之印	東大教養学部図書印



第一高等学校のあゆみ 成立から終焉まで



大正 1912-1926

4月 新高等学校令による高等科の文科・理科生徒入学。この年から4月が新学年開始月に

6月 一高・東大間で敷地交換(本郷⇄駒場)の交渉開始



(左) 動物園の実験室。和服を着て実験している姿が目立つ。大正初期
(右) 自習室。一つの机も4人で使う

3月 駒場移転の可否を生徒大会にかけ、移転の決議文を満場一致可決

9月 一高・東大間の敷地交換協定調印



大正13年の駒場川における儀典部一高正成戦、右が一高クルー

4月 一高医学部、独立して千葉医学専門学校となる

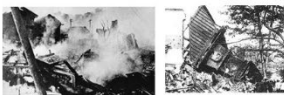
1901年(明治34年)

1902年(明治35年)

4月 高等学校大学予科学科課程を改正し、一部甲(英法・英政治・英文)、一部乙(独法・独文)、一部丙(仏法・仏文)、二部甲(工)、二部乙(理・農・薬)、三部(医)とする

1921年(大正10年)

1923年(大正12年)



(左) 本郷三丁目付近の蔵書
(右) 震災のため一高の蔵書時計台も解体

9月 関東大震災のため
9月中臨時休校を決定

1924年(大正13年)

8月 特設予科規定を制定。
おもに清国留学生のため



寮の生活
(左) 旧寮3階の蔵書。廊下外泊はやかましく「不眠点検」という制度があった
(右) 夜10時になると自習室の灯は消されあとはロソクの灯で勉強する。
「ローソク」の字は消えた

明治 1874-1912

12月 東京外国語学校の英語科を独立させ「東京英語学校」設置



東京英語学校の正門

1874年(明治7年)

1877年(明治10年)



明治時代の予備門展望
小川町。当時を遡って東京大学予備門が見える

4月 東京英語学校と東京開成学校普通科を併合して「東京大学予備門※」と改称
※当時の表記は「豫備門」

4月 東京大学予備門、中学校令に基づき「第一高等中学校」と改称



第一高等中学校の正門

1886年(明治19年)

1894年(明治27年)



一高学帽

9月 第一高等中学校、高等学校令に基づき「第一高等学校」と改称(略称「一高」)



大きなイベントのひびくつある記念祭。明治32年の記念祭開催時



明治35年「電呼玉柱」に花うけて。(矢野龍渓・作田/編正一・作編)。東京駅も重要なイベントであった



明治終わりに、大正初期にかけて、和服を着て実験している姿が目立つ。大正初期
(右) 自習室。一つの机も4人で使う

昭和 1926-1950



昭和10年、本郷から駒場へ移転
駒場蔵書(左図)に正門も出る

1932年(昭和7年)

1937年(昭和12年)



昭和10年6月、本郷最後
の蔵書。東京大学は輸入品の流通を促して取り続けた。



移転後の駒場キャンパス正門を隔てて表裏時計台を見る

10月 大学、高校などの修業年限6ヵ月短縮決定。
昭和18年3月卒業予定者は同17年9月卒業となる

1941年(昭和16年)

1942年(昭和17年)

8月 中学、高校及び大学予科の学年をそれぞれ4年、2年に短縮決定

5月 空襲により施設の一部焼失・損壊

8月 駒場で授業再開。校舎を焼失した東京高校に明寮を貸与

10月 陸海軍諸学校からの転入学試験実施。軍関係90名・外国外地引揚者64名入学

1945年(昭和20年)

1946年(昭和21年)

2月 高校修学年限3年制度復活



移転後の駒場の景観

12月 一高教授会。新制大学成立後一高は東大へ合流することが決定



駒場における一高のシンボル「常盤橋」

1947年(昭和22年)

1949年(昭和24年)

5月 新制の東京大学発足にともない、その前期2年の教養課程を担当する学部として「教養学部」設立

6月 一高は「東京大学第一高等学校」となる。以後翌年3月まで駒場キャンパスには教養学部と一高が併存



安政5年の島崎重忠の肖像画(複製)が所蔵されている。明治18年、東京大学(現・東京大学)の一部、駒場博物館所蔵資料を元に作成

3月 卒業式を行わない永年の慣例を破り倫理講堂で卒業式、夕方「第一高等学校」の門札を外す
31日をもって一高廃止



3月24日、東京の最後の日



卒業式終了後、駒場3階の校長の部屋に「第一高等学校」の門札が外された(左図)「第一高等学校」1950年

一高図書の特徴: 多彩な蔵書印

一高の沿革からして、英語学校・予備門・一中・一高の蔵書印があるのは当然であるし、予備門は、明治15年6月に東京大学医学部予科、明治18年8月に東京法学校予科と東京外国語学校独語科・仏語科を併合しているの、東京大学医学部、法学校、外国語学校の蔵書印があるのも不思議はない。もとより、予備門を管轄した東京大学あるいは東京大学法理文三学部の蔵書印もあれば、法学校を直轄した司法省、外国語学校の前身の第一大学区外国語学校、外務省洋語学所の蔵書印もあるし、明治18年12月の工部省の廃止により文部省に移管された工部大学校とその前身の工学寮の蔵書印もある。

しかし、そればかりではない。『第一高等学校六十年史』に載る「第一高等学校系統表」によって東京英語学校からさらに上流に遡ってみると、東京開成学校、第一大学区開成学校、第一大学区第一番中学校、南校、大学南校、東京開成所、幕府の開成所と源流をきわめることができる。

珍しいところでは長崎東衛官許の印と長崎府洋学局の蔵書印がある。前者は安政5年(1858)から幕府の長崎奉行人所が輸入洋書に捺した印であり、この印を捺した同じ図書が本郷の附属図書館に収蔵されている。一方、後者は安政5年7月に長崎に設置された英語伝習所(後に洋学所、語学所、済美館と改称)の後身たる長崎府管轄の広運館洋学局の印で、長崎府は明治元年5月から翌2年6月まで用いられた長崎県の旧称である。なお、広運館は明治4年11月に文部省に移管され、翌5年8月に第六大学区第一番中学となった。

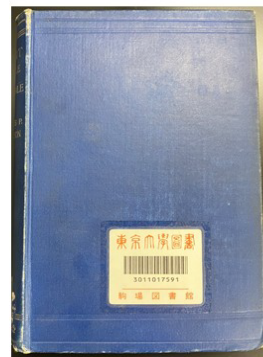
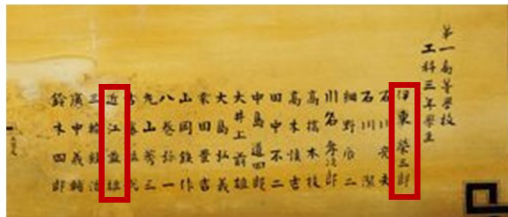
安達裕之
名誉教授
平成22年度ホームカミングデー企画展示
“知の伝承と駒場図書館” 解説文より転載

※第一高等学校ホームページ表
https://museum.u-tokyo.ac.jp/CHIKOH/home.html
および「東京大学教養学部 歴史・文化・教育研究」1997年
東京大学出版会)の一部、駒場博物館所蔵資料を元に作成



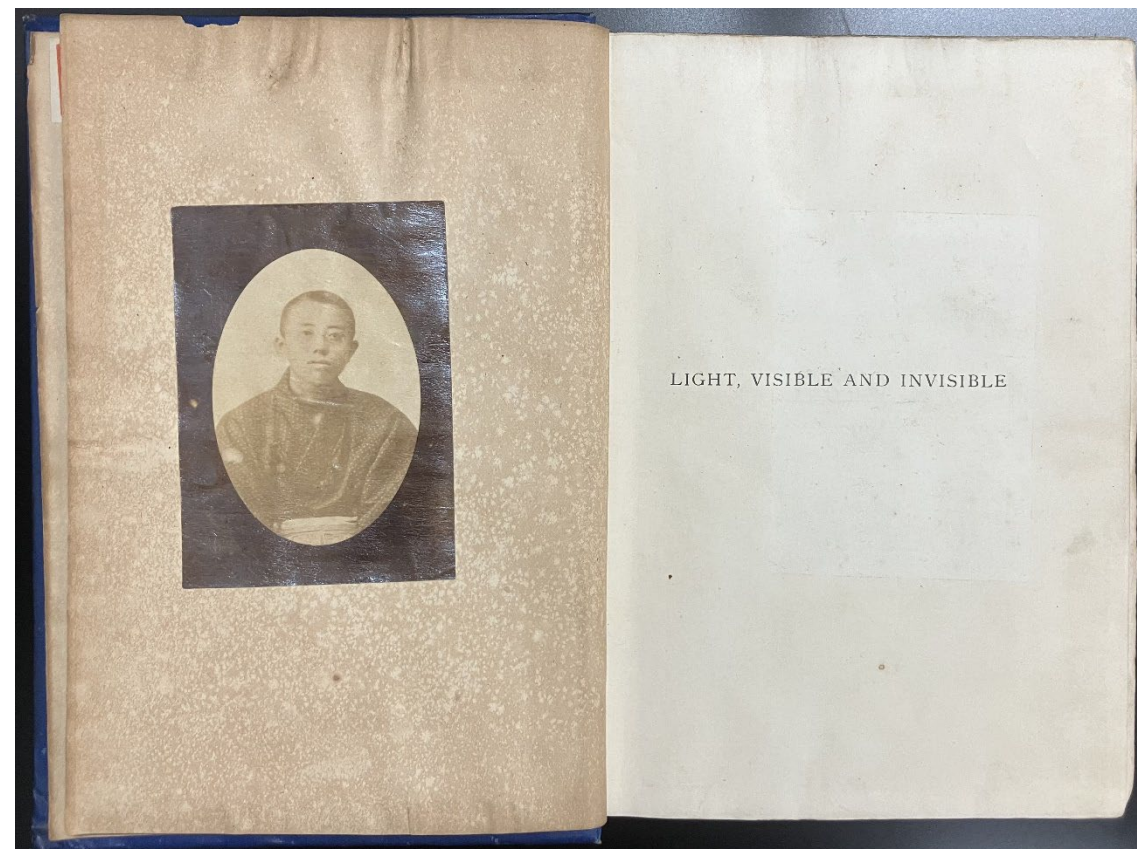
亡き友人を偲んで寄贈された図書

第一高等学校を明治31年7月卒業、8月に亡くなった近江益雄氏を偲んで寄贈された図書。図書の見返しには追悼の言葉が、次のページには肖像写真が貼り込まれています。

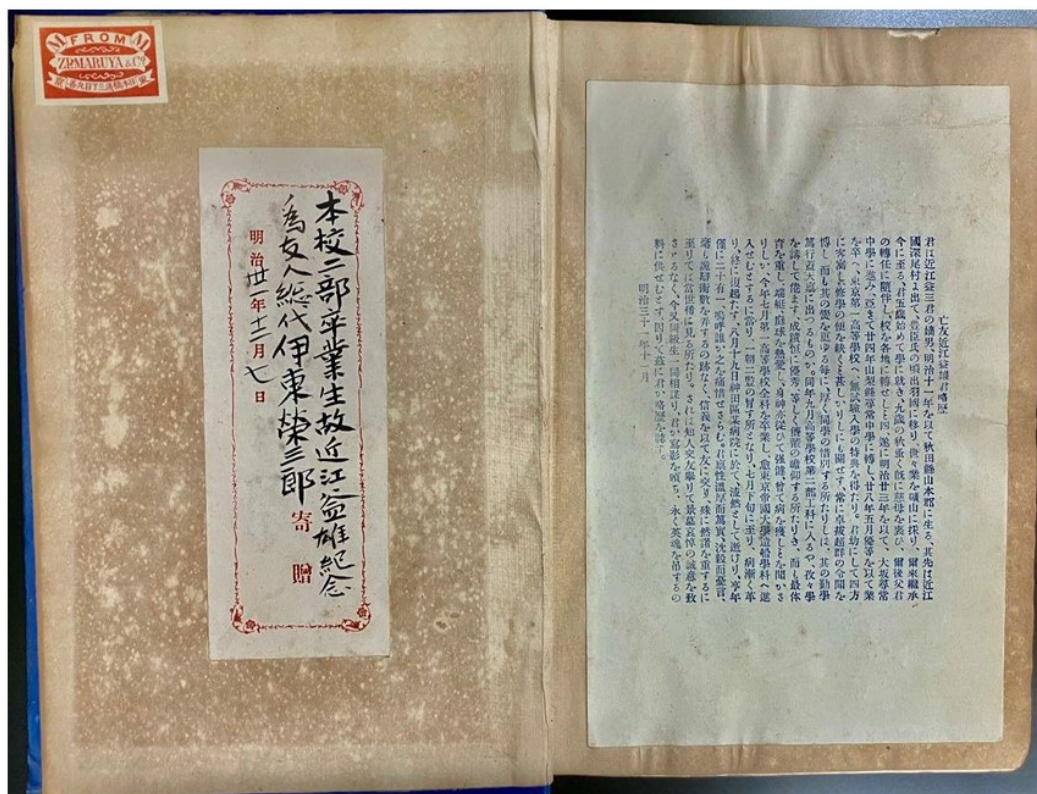


近江益雄氏及び友人総代伊東榮三郎氏は教育用掛図「芝公園実測図」製作者の中にその名が見つかります。

Light visible and invisible: a series of lectures delivered at the Royal institution of Great Britain, at Christmas, 1896 / By Silvanus P. Thompson



近江益雄氏の肖像写真



見返しの追悼文



芝公園実測図

東京大学デジタル
アーカイブポータル
で画像公開中





青島鹵獲本

第一次大戦の初頭、青島でドイツ軍に勝利した日本軍が目にしたものは、「理想的」とも評されるドイツの植民地経営の成果であった。また、当時の日本では貴重で高価であったヨーロッパの原書や、漢籍類も、膠州図書館、裁判所、病院などで多数発見された。大戦後、ベルサイユ条約（大正8年）によって、膠州湾域のドイツの国有の動産・不動産等は日本国の所有に帰したが、図書については教育機関から譲渡の希望が相次いだ。青島守備軍陸軍参謀部によれば、一高には、官有洋書103、膠州図書館旧蔵書243が送られたことになっている（志村恵「日独戦争と青島鹵獲書籍—旧膠州図書館所蔵文書等をめぐって—」）。

平成19年、金沢大学文学部の持井康孝教授と古市大輔准教授（いずれも当時）が調査された結果、駒場では11件の鹵獲書籍が発見された。いずれも膠州図書館の蔵書印や蔵書札があり、鹵獲書籍であることには間違いないが、奇妙なことに、そのすべては、「堀大司氏寄贈」の札が貼られた、昭和23年12月1日、廃止寸前の一高に寄贈されたものであった。堀は一高・東京大学教養学部勤務した英文学者であるが、どのような経緯で鹵獲書籍を所有するに至り、またそれらを一高に寄贈することになったかは不明である。

堀寄贈分は11件であり、記録によってわかる計346件の送付分の一部であるとしても、そのうちのごく一部である。持井教授・古市准教授は一高図書を入念に調査され、また部会所有の図書についても確認されたようであるが、堀寄贈分以外の鹵獲書籍は発見されなかったようである。

一方、本学部の安達裕之教授（造船史）は、別件での一高図書の調査の際、鹵獲書籍らしきものが未整理の書籍の中に存在することに気づいていた。今回、展示作成にあたって再度調査したところ、青島での鹵獲書籍が3冊、南洋諸島のヤップ島での鹵獲書籍らしきもの1冊が発見された。青島の鹵獲書籍のうち2冊は膠州図書館のもの、1冊は野戦病院のものである。一高における送付された鹵獲書籍の取り扱いの実態には不明な点が多いが、南洋由来のもの発見は意外であり、鹵獲・配布された書籍が、従来知られていた範囲の外にもあったことを窺わせる。

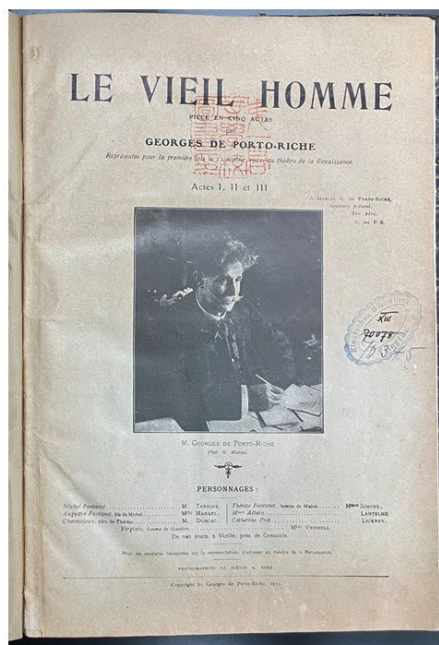
岡本拓司

大学院総合文化研究科図書館長

平成23年度ホームカミングデー企画展示「一高・獨逸駒場図書館篇」解説文より転載

青島鹵獲本の一冊

Le vieil homme : pièce en cinq actes / par Georges de Porto-Riche
(L'illustration théâtrale : journal d'actualités dramatiques)



読んでみたい
方はこちら！
東大OPAC



会期：2024年12月3日(火)～2025年1月14日(火)、
2月6日(木)～3月28日(金)

発行：東京大学駒場図書館
発行日：2025年3月7日

